

キャンパス・コラム

相互批判

四月号の本欄「ゼミ発表会」の続きを書かせていただく。総合政策学部の企業やOB向けのゼミ発表会に今年は異変がおきた。本番の発表時間の制約から六ゼミに絞った枠に、十二ものゼミが応募した。学部内予選がはじめて必要となった。

四月の本欄で、文化・語学系ゼミの参加が課題、と注文しておいたのが、これも実現した。十月下旬の予選会では辞退組も出て、結局十ゼミが競った。倍率1.66である。土曜日の午前十時から午後二時過ぎまでそれぞれ工夫をこらした発表が続いた。内容は一長一短で、審査をつとめた教員や、ゼミ員も選択に悩んだらしい。小生は「初応募組に優先権を」との持論を前もって学生を通じ準備委員会に伝えたが「昨年やったのは先輩だ。今年初参加はどのゼミも条件は同じ」と、“正論”であっさり否決された。だいたい運営自体が学生の手に入ったのだから結

構なことだ。

予選会で感心したのは、発表後の学生同士の質問の手厳しさである。本番の会場では、世慣れた企業人だから例年「やんわり」不備の点を指摘されるぐらいで済むが、予選会では「そんな少ない調査数をもとに結論をだしていいものか」「発表者の政治観はどうか」と突っ込む。「それぐらいの事は企業人はとっくにご存知ではないか」とまで言ったときは、さすがに反論しようかと思った。寅さんじゃないが「それをいっちゃ、おしまいよ」。学生の研究が企業人をあっと驚かすことはまず不可能だから…。しかし、ここはこらえた。

指摘されたゼミは、どうしたら「お客に感心して貰えるのか」と、また頭をひねり直すだろう。結果は当然よくなる。

予選会だけでも、これだけ批判しあうのだから、いっそ学部全学生に傍聴の機会を与えたらいいのにとの思いを新たにしたい。ゼミだけでなく卒論発表会の構想もある。賛成である。

広報委員 木村晃三（総合政策学部教授）

先日、奈良県飛鳥村にある高松塚古墳を訪れる機会があった。村全体が保護の対象となつて飛鳥村は古代の夢を漂わせる日本の原点、故郷として保存されている。この風景は、何故か日本人として誇らしさすら感じる。▼さて、その地にある高松塚の古墳も、発掘前はほんの小さな古墳として、それほど大きな期待はなかつたようである。しかし、この古墳が古代の夢の扉を開いたのは、周知のとおりである。▼ところで、先日世界中を騒がせた古代史における「ねつ造」事件は、人類の祖先という大きな歴史を人工的に細工してしまった、言わば夢（空想）の歴史作りだったと言えなくもない。夢を見ることは素晴らしいことである。しかし、空想と現実とを混同してしまった彼は、彼自身の純粋な夢すら破壊してしまったのではないだろうか。『華不再揚』（はな、ふたたび、あがらず）と言つ例えもあるが、一度壊してしまった夢は、二度と元の素晴らしい夢には戻らない。古代の歴史的な事実も、自分の純粋な夢も壊すことなく大切に扱って欲しいものである。

（広報課）

編集後記

Hakumon
ちゅうおう

2000・12月号（第162号）

2000年（平成12年）12月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141